

外国人のための
基本語用例辞典

DICTIONARY OF BASIC JAPANESE USAGE
FOR FOREIGNERS

外国人のための
基本語用例辞典

DICTIONARY OF BASIC JAPANESE USAGE
FOR FOREIGNERS

文 化 庁

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

刊 行 の こ と ば

近年、海外では多くの国々に日本語教育機関が設けられ、また、諸外国から日本に留学して日本語を学ぶ者が非常に増加した。

文化庁では日本語教育の充実・発展のために種々努力を重ねており、その施策の一つとして、教材・資料等の充実・整備のために意を用いてきた。

この「外国人のための基本語用例辞典」は、既に刊行した「外国人のための漢字辞典」および「外国人のための専門用語辞典」とともに、日本語教育における最も基礎的な資料作成の試みの一つである。日本語を学ぼうとするあらゆる外国人にとって、どうしても身につけなければならないと思われる基本的な語を集め、その活用・意味・使い方などを解説するとともに、きわめて豊富な具体的な用例を示して、日本語教育に役だつことを意図したものである。

この辞典は、ただ日本語を学ぼうとする外国人が学習する際に活用・利用することをねらっているばかりでなく、日本語教育に携わるかたがたにも、広く活用されることをねらいとしている。

この辞典の編集・作成にあたっては、日本語教育の専門家を委嘱し、採録すべき語の選定をはじめ、企画・執筆・編集・校閲、その他万般にわたって御協力をいただいた。

この種の辞典は初めての試みであり、それだけに何かと不備な点もあるかと思うが、これを土台として、今後さらに充実した内容のものが生まれることを期待するものである。

刊行にあたって、関係の多くのかたがたの御尽力・御厚意に深く感謝の意を表するしだいである。

昭和46年3月

文化庁文化部長

吉 里 邦 夫

この辞典の内容（ねらい）

- 1 この辞典は、日本語の中で特に基本的であると思われる語を中心として解説し、適切な用例を付して、外国人学生の日本語学習の効果を高めるのに役だつことをねらい、かねて、教師が学生を指導するのにじゅうぶん利用できるように意を用いて編集したものである。
- 2 本書を使用する学習者は、日本語を500時間内外学習した外国人学生、およびそれ以上の日本語の学力のある者と考える。
- 3 本書は学習者の立場から見れば、これまで、それほど広く、また厳密でもなく学習した基本的な語の意味・用法を再確認するとともに、さらにそれらの語についての認識を広げることをねらいとする。したがって、500時間ぐらい学習した程度の者にだけ利用されるのではなく、それ以上の高度の学習者にも大いに役にたちうるものである。
- 4 本書を使用する学習者の程度を考えて、あまり特殊な意味・用法には及ばない。
- 5 基本語として採録した語は、日本語の学習書や諸種の語彙調査などに見られるものを資料とし、その中から日本語学習の初級の段階において出あうことが多く、かつ必要度が高いと考えられるもの約2500語を編集委員会で選定した。
その際、語の構成要素に注意を払い、基本的なものはできるだけ採録し、未習の複合語などを理解する応用力をつけるように意を配った。
- 6 本書には、採録語を解説する本文と、本書の使い方を説明するまえがきのほかに、次のような付録を用意した。
(1) 日本語の文法 (2) 語の構成法 (3) 親族関係のよび方 (4) 数えることば
(5) コソアドについて (6) 擬声語・擬態語について (7) 漢字音訓表
(8) 索引

用例辞典の構成およびその使用法

I 見出し語

1 見出し語の書き方。

見出し語はひらがなで書いてあります。しかし、外来語などかたかなで書くのがふつうの語は、かたかなで書いてあります。その書き方は、現在行なわれている標準的（ひょうじゅんてき）な書き方によっています。したがって、次のような語は、ひくときによく気をつけなければいけません。

例 おおきい〔大きい〕、おとうと〔弟〕、せんせい〔先生〕、つづく〔続く〕

2 活用語*1の書き方。

見出し語が動詞・形容詞のときには、語幹*2（ごかん）と語尾*3（ごび）の間に「・」がつけてあります。したがって、動詞でも「する」「来る」「見る」などのように、語幹と語尾の区別（くべつ）がない語にはつけてありません。

例 か・く〔書く〕、お・きる〔起きる〕、とりあつか・う〔取り扱う〕、ちいさ・い〔小さい〕

形容動詞は語幹だけを見出し語としてしめしてあります。

例 きれい、にぎやか、しずか

助動詞も、語幹と語尾の区別のある語は、その間に「・」がつけてあります。

例 さ・せる、な・い、よう・だ

*1, 2, 3 は付録「日本語の文法」をみなさい。

3 見出し語のならべ方。

見出し語は五十音順（じゅん）（あ・い・う・え・お・か・き・く……の順）にならべてあります。そのとき、ひらがなとかたかなによる区別（くべつ）はしてありません。そのほか、次のことに注意しなさい。

① 濁音（だくおん）を表わすかな（が・ぎ・ぐ……、など「ゝ」のついたかな）や半濁音を表わすかな（ば・び・ぶ・べ・ぼ）は清音（せいおん）を表わすかな（「ゝ」や「ゞ」のついていないかな）と同じように扱（あつか）いました。しかし、それらがつづくときには、清音・濁音・半濁音の順にならべてあります。

例 「は〔葉〕」と「ば〔場〕」とでは「は」のほうが先です。

「はち〔蜂〕」と「ばち〔罰〕」とでは「はち」のほうが先です。

「はっと」と「ぱっと」とでは「はっと」のほうが先です。

- ④ 促音（そくおん）を表わすかな（「がっこう〔学校〕」「きって〔切手〕」などの小さい「っ」や拗音（ようおん）を表わすかな（「ちゃ〔茶〕」「きゅう〔急〕」「きょう〔今日〕」などの小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」）も促音や拗音以外の音を表わすかなと同じようにあつかいました。しかし、それらがつづくときには、促音や拗音を表わすかなのあるほうがあとにならべてあります。

例 「いつか〔何時か〕」と「いっか」とでは「いつか」のほうが先です。

「しょう〔使用〕」と「しょう〔小〕」とでは「しょう」のほうが先です。

- ⑤ 外来語など、見出し語がかなで表記されるときに、長く伸（の）ばす音を示す「ー」は、それが全くないものとして扱（あつか）ってあります。したがって、「スカート」は「スカト」, 「ノート」は「ノト」と考えてひかなければいけません。

4 見出し語の漢字表記。

(1)、表記のしかた。

見出し語がふつうは漢字で書き表わす語である場合には、その漢字表記を、「〔 〕」に入れて、見出し語の次に示してあります。

例 ほん〔本〕。よ・む〔読む〕。

したがって、「〔 〕」に漢字が示していないものは、ふつうは漢字で書かれることのない語です。

一つの見出し語に二つ以上の漢字表記のあるときは、その用法の一般的（いっぱんてき）なものから特殊（とくしゅ）なものへと順（じゅん）にあげてあります。（その使い分けについては、意味・用法を説明したところや、用例などで注意しているものもあります。）

(2) 表外漢字の扱（あつか）い。

漢字表記は、当用漢字であって、しかもその音訓表の範囲内（はんいない）で使用できるものを示すようにしてあります。しかし、社会で広くふつうに漢字表記が行なわれているものは、当用漢字ではあるが、その音訓表で読み方がみとめられていないもの、また、当用漢字以外の字も、それをしめし、その字の上に「ゝ」をつけました。

例 あいさつ〔挨拶〕。あきら・める〔^ゝ辞める〕。

(3) 送（おく）りがな。

送りがなは、現在その標準（ひょうじゅん）とされているつけ方によっています。二つ以上の送りがなのつけ方が考えられるときには、略してもよいものを「（ ）」に入れてしめました。

例 あかり〔明（か）り〕。

5 品詞名*4。

(1) 品詞名のしめし方。

見出し語（漢字で書ける語は、その漢字表記）の次に、見出し語の品詞名が「（ ）」に入れて示してあります。

例 いしゃ〔医者〕（名詞）

うご・く〔動く〕（動詞）

きっと（副詞）

ただし、一つの見出し語が二つ以上の品詞として用いられるときには、「Ⅰ、Ⅱ、……」と分けて、それぞれに品詞名がしめしてあります。

例 ほん〔本〕

Ⅰ （名詞）……………

Ⅱ （接尾語）……………

(2) 品詞の種類。

この辞典（じてん）では品詞が次のように分けてあります*5。

名詞。代名詞。動詞。形容詞。形容動詞。副詞。連体詞。接続（せつぞく）詞。感動詞。助詞。助動詞。そのほか接頭語。接尾語。連語も必要に応じてあわせかかげました。

*「連語」というのは、「ほかならない」「みるみるうちに」「もしかすると」など、二つ以上の語がいっしょになって、一つの語のようなはたらきをしているものです。

(3) 名詞とⅣ型（がた）動詞*6、あるいは名詞と形容動詞の二つの用法がある語の扱（あつか）い。

見出し語が名詞で、あとに「する」がついてⅣ型動詞としても使われる語は（名詞、～する）、また、形容動詞としても使われる語は（名詞、～な・に）あるいは（名詞、～な・の）と書いてあります。

例 あい〔愛〕（名詞、～する）

あんぜん〔安全〕（名詞、～な・に）

*4,5,6 は付録「日本語の文法」をみなさい。

6 活用語の活用形の示し方など。

(1) 活用形の示し方。

動詞・形容詞・形容動詞・助動詞など、活用のある語には、活用形などが「{ }」に入れて品詞名の次に書いてあります。

動詞、たとえば「よ・む〔読む〕」では、

{ ①まーない ②みーます ③④む (ーとき) ⑤めーば ⑥め ⑦もーう }
 { ⑧⑨んーで (だ) ⑩むーだろう }

形容詞は、

{ ①くーない ②くーなる (する) ③④い (ーひと) ⑤けれーば ⑥く }
 { ーて ⑨かっーた ⑩いーだろう (かろーう) }

形容動詞は、

{ ①でーない ②にーなる (する) ③だ ④なーひと ⑤ならーば ⑥で }
 { ⑨だっーた ⑩だろーう }

助動詞もそれぞれの活用^しのしかたによって、上と同じようにその活用形が示してあります。

①から⑩による活用形の示し方は次のようです*7。

①は助動詞「ない」につづくときの形 (動詞は助動詞「せる (させる)」「れる (られる)」につづく形もふくむ。) です。

②は、動詞では助動詞「ます」などにつづくときの形、形容詞・形容動詞では、動詞「なる」「する」などにつづくときの形です。

③は、そこで文が終 (お) わるときの形です。

④は、名詞などへつづくときの形です。

⑤は、助詞「ば」へつづくときの形です。

⑥は、命令するときの形です。

⑦は、助動詞「う (よう)」につづくときの形です。

⑧は、助詞「て」につづくときの形です。

⑨は、助動詞「た」につづくときの形です。

⑩は、助動詞「だろう」につづくときの形です。

①～⑩によって、活用語の活用が全部示されているわけですが、動詞の活用^しの③、④および⑧、⑨のように形が同じ場合は、上の例の「③④む (ーとき)」 「⑧⑨んーで (だ)」のように、いっしょに示しました。また、形容詞や形容動詞・動詞には、⑥、⑦がないのは、命令する形や助動詞「う (よう)」につづく形がないからです。

(2) I 型 (がた) 活用動詞*8から作られる可能動詞*9の扱 (あつか) い。

I 型活用の動詞から可能動詞を作ることができるもの (「かく [書く] → かける [書ける]」「よむ [読む] → よめる [読める]」など) は、活用形を示したあとに、「(可能)」としてそれが示してあります。

例 よ・む [読む] (動詞) {①……⑩…… (可能) よめる}

(3) 形容詞・形容動詞につく接尾語「さ」「み」の扱 (あつか) い。

形容詞・形容動詞で、語幹*2（ごかん）に接尾語「さ」あるいは「み」がついて名詞になる場合は、活用形を示したあとに、次のように示してあります。

例 あたたか・い〔暖かい・温かい〕（形容詞）

{①……⑩……（名詞、～さ・～み）}

- (4) （名詞、～する）、（名詞、～な・に）の活用形の扱（あつか）い。

「（名詞、～する）」によって動詞としても用いられることを示した語には、その活用のしかたは示してありません。動詞「する」の活用のしかたを参考（さんこう）にしてください。

また、（名詞、～な・に）によって形容動詞としても用いられることを示した語についても、その活用のしかたは示してありません。他の形容動詞の活用のしかたを参考（さんこう）にしてください。

*2,7,8,9 は付録「日本語の文法」をみなさい。

Ⅱ 意味・用法の説明

見出し語について、その漢字表記、品詞名、活用のしかたなどを記入した次に、その語の意味や用法が説明してあります。

- 1 見出し語がいくつかの意味・用法をもつ場合の扱（あつか）い。

見出し語がいくつかの意味や用法をもつ場合には、「1, 2, ……」と項（こう）を分けてそれぞれの意味や用法が示してあります。

「1, 2 ……」と項を分けた中で、さらにもっとこまかく分けて説明する必要があるときは、「1, 2 ……」のそれぞれがさらに「①, ② ……」と分けてあります。

- 2 意味・用法の説明のしかた。

見出し語の意味はできるだけやさしくて、わかりやすいことばに言いかえて説明してあります。

ほかのことばに言いかえただけでは、その語の意味がじゅうぶんに表わせなかったり、特に必要な文法的なことについての説明をしたりするときは、それが「／／」に入れて書いてあります。接頭語・接尾語・助詞・助動詞などは「／／」による説明だけのことが多いです。

意味・用法の説明をするのに、まだ理解できないと思われるむずかしいことばを用いなければならなかったときは、そのことばのあとに「（＝）」の形で、さらにそのことばの意味が説明してあります。

- 3 参照語（さんしょうご）の示し方。

見出し語と反対の意味をもつ語、意味のよく似（に）ている語、あるいは、見

出し語の意味や用法を理解するのに、その語もいっしょにみれば役にたつと思われる語が、意味・用法の説明のあとに、「→」によって示してあります。

また、「あおじろい→あお（5ページ）」のように示してあるのは、「あおじろい」という語は、「あお」のところを見なさいという意味です。

Ⅲ 用 例

1 用例のあげ方。

意味や用法によって分けられた各項（かくこう）ごとに、初めに「○」をつけて、それぞれいくつかの用例が示してあります。

用例は、この辞典の中でいちばんたいせつなものです。

用例は、その語の意味や用法がよく理解できるようなものから順（じゅん）にあげてあります。特にいつも特別な語といっしょに使われるものや、文法的な面で注意が必要なものは、その用例をあげるようにしました。

用例のむずかしさ、やさしさの点からは、用例を通してその語の意味・用法がよく理解でき、また、その用例を応用（おうよう）して表現するのに利用しやすいものできるだけ多くあげ、あまり特別な使い方の例などはあげませんでした。

また、見出し語が活用語の場合には、その用例中になるべく多くの活用形を示すようにしました。

用例の多くは、その見出し語の使われている文の形によって示してありますが、他の語と結びついて一語となっている場合の例を示したものもあります。特に接頭語や接尾語はその例が多いです。（V 関連語をも見よ。）語例をあげるときには、見出し語にあたる部分の意味が同じ場合には、一つの「○」のところに、つづけていくつかの語例を示したものがあります。

2 用例中の見出し語の扱（あつか）い。

用例中の見出し語にあたる部分には、その下に「——」が引いてあります。

また、見出し語の発音が、前にくるとばによって変わるような場合には、（ ）の中にその発音を示してあります。

例 「ほん〔本〕（接尾語）」の項（こう）。

1 本（いっほん）、2 本（にほん）、3 本（さんぽん）。

3 用例中の見出し語の表記。

用例中の見出し語にあたる語の表記は、次のようにしてあります。

㊦ 見出し語の漢字表記が当用漢字であり、しかもその音訓表で定められている音訓の範囲内（はんいない）で書かれているときは、その漢字をそのまま使

っています。

③ ①以外のときはかなで書いてあります。

④ ②の中でも、社会でかな書きが多くおこなわれているものは、かなで書いてあります。

4 用例中のむずかしい語句の扱(あつか)い。

用例の中に使ったことばで、理解することがむずかしいと思われるものには、その下に「_____」を引いて意味・用法の説明の場合と同じように、そのことばのあとに、「(= _____)」に入れてその意味が示してあります。

Ⅳ 見出し語の意味・用法や用例についてのいろいろな注意。

外国人がまちがえやすい例や、意味のよく似(に)ている他の語との使い分けなど、見出し語の意味・用法や用例についてのいろいろな注意が、用例のあと(関連語があれば、その前)に示してあります。

① 見出し語の意味・用法の説明が、品詞の別や意味・用法のちがいなどによって、いくつかの項(こう)に分けて行なわれているとき、それらのある項にだけ関係がある場合には、その項のいちばん終(お)わりに、「／／」に入れて記入してあります。

なお、ある用例だけに関係があるときは、その用例のあとにつづけて「／／」に入れて記入してあります。

② 品詞の別や、意味・用法のちがいなどに関係なく、その見出し語全体に関する注意である場合には、「☆」をつけて用例のあとに示してあります。ただし、「Ⅰ、Ⅱ……」「1、2…」などと項(こう)が分けられていなければ見出し語全体に関する注意でも、「／／」に入れて示してあります。

Ⅴ 関連語

見出し語と意味や形の上で関係がある語で、見出し語としては取り上げなかった語を、「(関連語)」として、いちばんあとに示したものもあります。また、用例として用例の最後に示したものもあります。その中で、①は見出し語と形の上で同じ部分のある語です。②は形の上で共通の部分はないが、意味の点で関係のある語です。

Ⅵ 小見出し

ふつうの見出し語のあとに、その見出し語と形と意味の上で関係の深(ふか)い語を、少し小さい字で、一まとめにしてあげたものがあります。たとえば、見出し

語「あお〔青〕」のあとに、「あおあおと〔青々と〕」「あおじろい〔青白い〕」「あおみ〔青み〕」「あおぞら〔青空〕」がつづけてあげてあるのがその例です。

これらの小さい字であげた見出し語は、その意味・用法の説明や用例が、ふつうの見出し語に比（くら）べて、やや簡単（かんたん）にしてあります。

また、このような小さい字の見出し語が、ふつうの見出し語の次につづけておかれたために、これらもふくめてみると、五十音順（じゅん）のならべ方が少しちがってきているところがあります。

Ⅶ 意味・用法の説明や用例などに使った漢字。

意味・用法の説明や用例などに使った漢字は、特別な場合をのぞいて、当用漢字であって、しかもその音訓表によってみとめられている音訓で使えるものだけです。そのとき、

- ㊦ 別表「この辞典に用いられている漢字」にあげた漢字で、その字の音訓としてみとめられている範囲内（はんい）の音訓で使うときは、原則として読みがながつけてありません。
- ㊧ 別表以外の漢字を使ったときには、「（ ）」に入れて、その字の読み方が示してあります。

特別に、当用漢字表外の漢字を使ったり、また、当用漢字ではあっても、音訓としてみとめられていない読み方をしたりするときにも、その読み方が「（ ）」に入れて示してあります。

この辞典に用いられている漢字

果漢教係後及詞手助人說卒地庭同及樹米万門
 運花開京敬語左思者女親接足子程頭表平未日業
 南科活共彤午芝私社書新切造弟答能百四枚困嫌類
 右何樂去兄五使車諸進石總男定當乙必每要正
 刃可學急匠古今始災所神赤分單旁等尾文又面洋
 化画休個込死日初真声相台冬年美聞命容力
 貝火格九君互黑市質存申性早題通東困彼分本明用料
 因下各客訓國四七出信青組第度徒入回副北回回旅
 引國外議空現弓仕式重身政豆代徒入回副北回回旅
 一解婦句原合子色住心成大直十二風法略話
 育音絵期苦言考を時十食西然熊調都三番部方無友律和
 意屋会記乙元校持集場正前体朝下半付母回由立乙
 位孟海汽駿高産事週状生全刈長南反婦歩回理
 以界氣銀見向山次秋上世戰打町電内猪夫困民利六
 王田回困金犬行三自授章團線多注田所八父味約回豆
 役歌近月交昨字受消船他中点自不勉未夜
 安映夏顔局結光作姉種昭数先列着店読売回麥回屋落連
 愚英過関業決工在紙取少水川知天特買返來例
 匠国家感強計口最試主小匠千村治的動配品別満問回令

索引

〔あ〕

ああ	1	あかるみ (明るみ)	10
あい (愛)	1	あかんぼう (赤ん坊)	10
あいかわらず (相変わらず)	1	あき (秋)	10
あいさつ (挨拶)	1	あき (空き・明き)	10
あいじょう (愛情)	2	あきらか (明らか)	10
あいず (合い図)	2	あきらめる (靜める)	11
あいそう (愛想)	2	あきる (飽きる・厭きる)	11
あいだ (間)	3	あきれる (呆れる)	11
あいついで (相次いで)	622	あく (開く)	12
あいて (相手)	3	あくしゅ (握手)	12
あいにく	3	あくま (悪魔)	12
アイロン	4	あくまで	13
あう (合う)	4	あくる (明くる)	13
あう (会う)	4	あくるとし (明くる年)	13
あえて (敢えて)	5	あくるひ (明くる日)	13
あお (青)	5	あげく (挙句・揚句)	13
あおあおと (青々と)	5	あける (明ける・開ける)	13
あおい (青い)	6	あげる (上げる・掲げる・挙げる)	14
あおぐ (扇ぐ・煽ぐ)	6	あご (膂・顎)	15
あおぐ (仰ぐ)	6	あこがれる (憧れる・憬れる)	15
あおじろい (青白い)	5	あさ (朝)	16
あおぞら (青空)	5	あさい (浅い)	16
あおみ (青味)	5	あさって	17
あおむけ (仰向け)	6	あさね (朝寝)	16
あか (赤)	7	あさねぼう (朝寝坊)	16
あか (垢)	7	あさばん (朝晩)	16
あかあかと (赤々と)	7	あさひ (朝日)	16
あかあかと (明々と)	7	あし (足)	17
あかい (赤い)	7	あじ (味)	18
あかみ (赤み)	8	あしあと (足跡)	18
あかり (明 (か) り)	8	あした (明日)	19
あがりさがり (上がり下がり)	9	あしなみ (足並み)	19
あがる (上がる・揚がる)	8	あしぶみ (足踏み)	19
あかるい (明るい)	9	あしもと (足下・足元)	19
		あす (明日)	19
		あずかる (預かる)	20

あずける(預ける).....	20	あてはまる(当てはまる).....	31
あすこ.....	21	あてはめる(当てはめる).....	30
あせ(汗).....	21	あてる(当てる・充てる・宛てる).....	31
あそこ.....	21	あと(後).....	32
あそび(遊び).....	21	あと(跡).....	32
あそぶ(遊ぶ).....	21	あとかたづけ(後かたづけ).....	32
あたえる(与える).....	22	あとさき(後先・あと先).....	32
あたたかい(暖かい・温かい).....	22	あとしまつ(後始末・あと始末).....	33
あたたかみ(暖かみ・温かみ).....	23	あとまわし(後回し・あと回し).....	33
あたたまる(暖まる・温まる).....	23	あな(穴).....	33
あたためる(暖める・温める).....	23	あなた.....	33
あたま(頭).....	23	あなたがた.....	33
あたらしい(新しい).....	24	あに(兄).....	33
あたり(辺).....	24	あね(姉).....	34
あたり(当(た)り).....	25	あの.....	34
あたりまえ.....	25	あのかた.....	34
あたる(当たる・中たる).....	25	あのね.....	34
あちこち.....	26	あのひと(あの人).....	35
あちら.....	26	あばく(暴く・発く).....	35
あちらがわ(あちら側).....	26	あばれる.....	35
あちらこちら.....	26	あびる(浴びる).....	35
あっ.....	27	あぶない(危い).....	35
あつい(暑い).....	27	あぶら(油・脂).....	36
あつい(熱い).....	27	あぶる.....	36
あつい(厚い).....	27	あふれる.....	36
あつかい(扱い).....	28	あまい(甘い).....	37
あつかう(扱う).....	28	あまえる(甘える).....	37
あつぎ(厚着).....	28	あます(余す).....	38
あつくるしい(暑苦しい).....	29	あまみ(甘み).....	37
あっさり.....	29	あまやかす(甘やかす).....	37
あったかい.....	23	あまやどり(雨宿り).....	39
あっためる.....	23	あまり(余り).....	38
あっち.....	29	あまる(余る).....	38
あつまり(集まり).....	30	あみ(網).....	38
あつまる(集まる).....	29	あむ(編む).....	39
あつみ(厚み).....	28	あめ(雨).....	39
あつめる(集める).....	30	あめ(鮎).....	39
あつらえる(訛える).....	30	あやしい(怪しい).....	39
あて(当て・充て・宛).....	31	あやまる.....	40
あてな(宛名・あて名).....	32	あゆみ(歩み).....	40

あらい(荒い).....	40
あらう(洗う).....	40
あらかじめ(予め).....	41
あらかた.....	41
あらし(嵐).....	41
あらす(荒す).....	41
あらすじ(粗筋・荒筋).....	41
あらそう(争う).....	42
あらそって(争って).....	42
あらたまる(改まる).....	42
あらためて(改めて).....	42
あらためる(改める).....	42
あらわす(現わす・表わす).....	43
あらわれ(現われ・表われ).....	43
あらわれる(現われる・表われる).....	43
ありがたい(有り難い).....	43
ありがとう(有り難う).....	44
ありさま.....	44
ありふれた.....	44
ありません.....	45
ある(有る・在る).....	44
ある(或る).....	45
あるいは.....	45
あるく(歩く).....	45
あれ.....	46
あれから.....	46
あれこれ.....	46
あれる(荒れる).....	46
あわ(泡).....	46
あわす(合わす).....	47
あわせる(合わせる).....	47
あわただし.....	47
あわてる.....	47
あわれ(哀れ).....	48
あんがい(案外).....	48
あんき(暗記).....	48
あんじる(案じる).....	49
あんしん(安心).....	49
あんぜん(安全).....	49
あんてい(安定).....	49

あんな.....	50
あんない(案内).....	50
あんなに.....	50
あんまり.....	38

[い]

い(位).....	51
い.....	51
いい.....	51
いいあう(言い合う).....	52
いいあらわす(言い表わす).....	52
いいえ.....	52
いいえ、どういたしまして.....	53
いいかえす(言い返す).....	53
いいかげん.....	53
いいかた(言い方).....	56
いいきかせる(言い聞かせる).....	53
いいつかる(言い付かる).....	54
いいつける(言い付ける).....	53
いいつたえ(言い伝え).....	54
いいわけ(言い訳).....	54
いいん(委員).....	54
いう(言う).....	54
いえ(家).....	56
いか(以下).....	56
いがい(以外).....	57
いかが.....	57
いかす(生かす).....	57
いかに.....	58
いかにも.....	58
いかり(怒り).....	58
いき(息).....	58
いき(行き).....	59
いきいきと(生き生きと).....	59
いきおい(勢い).....	59
いきかえり(行き帰り).....	62
いきかえる(生き返る).....	59
いきさつ.....	59
いきちがい(行き違い).....	1057
いきなり.....	60

いきのこる(生き残る).....	60	いためる(傷める・痛める).....	70
いきもの(生き物).....	60	いち(一・巻).....	70
いきる(生きる).....	60	いち(市).....	71
いきわたる(行き渡る).....	1058	いちおう(一応).....	71
いく(行く).....	61	いちがいに(一概に).....	72
いく(幾).....	62	いちじつ(一日).....	72
いくじがない(意気地がない).....	62	いちど(一度).....	71
いくつ(幾つ).....	62	いちどに(一度に).....	72
いくど(幾度).....	62	いちにち(一日).....	72
いくにん(幾人).....	62	いちねん(一年).....	71
いくら(幾ら).....	62	いちば(市場).....	71
いくらか(幾らか).....	63	いちばん(一番).....	73
いけない.....	63	いちぶ(一部).....	73
いける(生ける・活ける).....	63	いちぶぶん(一部分).....	73
いけん(意見).....	64	いちめん(一面).....	73
いご(以後).....	64	いちよう(一樣).....	73
いこう(以降).....	64	いつ.....	73
いさましい(勇ましい).....	64	いつか.....	74
いし(石).....	64	いっか(一家).....	74
いし(意志・意思).....	65	いっこう(一向).....	74
いじ(意地).....	65	いつごろ.....	74
いじめる.....	65	いっさい(一切).....	75
いしゃ(医者).....	66	いっしゅ(一種).....	75
いじょう(以上).....	66	いっしょ(一緒・一所).....	75
いじわる(意地悪).....	65	いっしょう(一生).....	76
いす.....	66	いっしょうけんめい(一生懸命).....	76
いずれ.....	67	いっしん(一心).....	76
いせい(威勢).....	67	いっせいに(一斉に).....	76
いぜん(依然).....	67	いっそ.....	76
いぜん(以前).....	67	いっそう(一層).....	77
いそがしい(忙しい).....	68	いったい(一体).....	77
いそぎあし(急ぎ足).....	68	いったん(一旦).....	77
いそぐ(急ぐ).....	68	いっち(一致).....	77
いた(板).....	68	いってい(一定).....	77
いたい(痛い).....	68	いつでも.....	74
いたす(致す).....	69	いっとう(一等).....	78
いたずら.....	69	いつのまに.....	78
いただく(戴く).....	69	いつのまにか.....	78
いたみ(痛み・傷み).....	70	いっばい(一杯).....	78
いたむ(痛む・傷む).....	70	いっばん(一般).....	78